

幼児における「結び行動」の諸相*

平 田 智 久**

はじめに

子どもたちの生活に接し、子どもの行動力は、単なる稚拙な行動として考えることができない力強さを感じさせる。子どもが生きる環境の中で、周囲の大人文化に接し、さまざまに模倣して体得するものもたくさんある。

言語も習慣も、子どもの育つ環境によって生まれ、子ども自身が吸収していく。その意味では、大人の生き方が子どもを左右すると言っても過言ではない。

子どもたちは、真剣に大人の行動を見つめ模倣し、自らの能力にしていく。その姿を観察していると、模倣した行動であっても、懸命に考え工夫していることがわかる。ここで取り上げた「結び行動」も、子どもたちの懸命な行動のひとつであり、子どもの生活を観察していると以外に多く見ることができ行動である。没頭している遊びの中での「結び行動」に、子どもなりの考え工夫している姿を見、生活の中での造形行動として強く興味を持った。身近にある素材（もの）に働きかけ、その素材を変容させながら、生活をより豊かにする営み……として受け止められたからである。

そこで前回（1991年、十文字学園女子短期大学研究紀要第22集で発表）“幼児の「結び」行動、その発達過程”において、子どもたちの「結び行動」の技術的発達の過程について調査し、その結果「結び」行動にも、描画発達などと同様、おおよその発達の姿が浮きぼりになった。

さらに、その子どもたちの行動調査を通して、次の様なことがわかった。

結ぶ行為にも、子どもなりに思いや考えがこめられている。結んだ経過は、結び目の形状によって汲みとることができ、また、結びながらイメージが浮かび、そのイメージで遊びが広がっていくこともある。

（以上の詳細については、前出の紀要で発表した通りである。）

とかく、今までの造形指導の中で見落されがちだった「結び」行動にも、子どもの感性が表われている……とするならば、どのような観点で子どもたちと接することが望ましいのだろうか。造形指導の考え方やその方法について、また、子どもの生活そのものを見つめ直すこと

は、保育のあり方にも大きく影響する。

さらに、子どもたちの行動は、大人の模倣としての行動と受け止める視点ばかりでなく、拡大して考えると、「結び」文化の源流を子どもたちの行動に見ることができかもしれない……と考えられる。

以上の観点から、再度子どもたちの「結び行動」を見直してみる意義は大きいと考え、再調査を試みることにした。

<調査方法>

1975年より現在まで関係している保育所（千葉県我孫子市）での活動記録をスライドや写真で整理しており、その中から「結び行動」に関わる資料を抽出し分析を試みた。また、神奈川県逗子市及び横浜市の私立幼稚園での実践例の中からも、関係する活動を選び出し比較検討してみた。

約300点の「結び行動」に関わる資料を、

- ①子どもの思いや考えの内容によって分類する。
- ②その分類した項目ごとに考察する。

という方法で実施した。

<結果と考察>

考察1 身につける「結び行動」

子どもたちは日常生活の中で「結び行動」に出会っている。昔に比べると著しく少なくなっていることは事実である。ゴムの一般化にあわせて衣服も靴も、ひもの世界からゴムの世界へ変った。さらに現代ではゴムからマジック・テープに移り変わり、一層ひもの世界が遠ざかってしまっている。

その現代においても「結び行動」が子どもの身近な生活の中に存在していることも事実である。

エプロンのひも、髪を束ねたり飾ったりするリボン、弁当などの包み……など、以外に「結び」の例は多い。

<1—事例① 布を体に巻きつけて……>

洋服製造の家から、不用になった裏地を10巻ほどもらった。1巻が5mから10m程ある。保育室に置いておく。

その裏地を見つけ、長く引き出し、遊び始める。やがて部屋中に布の川ができた。その布の中にもぐり込んだり、頭からかぶって「おぼけ！」などと言って遊ぶ。

さらに、頭や腰に巻きつけ、縛りだした。一人が始め

* Some Phases of Children's "Knotting" Activities

** Tomohisa HIRATA 幼児教育学科

ると、数人が呼応して始める。前で結ぶことができる子どもでも後ろで結ぶのは難しいようで、子ども同志お互いに結びあいながら遊んでいた。

<1—事例② 風呂敷を置いておくと……>

日頃から、家庭で使わなくなった風呂敷を園に置いてもらうようにしている。布という感能にも親しみ、活用してほしい……という願いがあってである。

子どもたちは、この風呂敷が大好きで、ゴムが入った体操ズボンにはさみ込んで、「スカート」にしたり「ネコのしっぽ」にして遊ぶことが多い。中には、ズボンにはさみ込まずに、しばっている子もいる。

そのしばってある風呂敷（4角のうち2つがしばってある状態）が、そのまま放置されていることもあり、そのままの状態の風呂敷を頭にのせて「お姫様……」と言って喜んでいる子もいる。

また、2角を結んだ風呂敷に頭を通し首に巻きつけた状態（少々危険な気はするが注意しながら見守る）で「アンパンマン」と、ごきげんな様子。このスタイルは昔から好まれていて、その時代の流行にあわせてネーミングされている。（ex. 月光仮面、ハリマオ、七色仮面、スーパーマン、仮面ライダー、ゴレンジャー、ファイブマン、電磁マン……男子のヒーローが多いが、最近では女子のヒーローとして、美少女仮面も登場している）

<1—事例③ ひも（リボン）を……>

プレゼントなどによく使われるリボンも、子どもにとっては欠かせない遊び道具である。髪に結んだり、腕につけて満足している。髪につける時などは、当然のことだか、一人でなく数人の友達と遊んでいる時で、互いに結びあっている。

また、リボンやひも、毛糸などで“三つあみ”を作って、その長さを競ったり“3つあみ”したひもを使って髪飾りやブレスレットにして、自満気に見せてくれる。

そんな折、布をさいてひも状にしておいた。すると、リボンと同様にさまざまに使い始めた。その質感から、リボンより量感もあり、強度もある為、喜んで使い、それを組み合わせて、縄とびをしたり、「これ魚！」と8の字型にして見せてくれたりもした。

男子のひとは、ひもをベルト状に腰に幾重にも巻きそして結んで、「変身ベルト！」と得意になって遊んでいた。

<考察1—まとめ>

身につけることによって、子どもたちのイメージは拡大していくようである。自分が何かになりきる……とい

う行為は、子どもだけでなく、大人にもあるのではないだろうか。平服から礼服に着がえた時なども、ユニフォームを着た時の心境にも、子どもの変身あそびと共通した心もちがあるのではないだろうか。

身にまとう……という行為から、動いても取れない工夫として「結び」、結ぶことによって形態を変化させ、イメージを新たに思い描いていることがわかる。

子どもたちの工夫の姿は、インドの民族衣裳や古代エジプトの壁画の一端を見ているようにも思える。

考察2 どうしても～したい……という「結び行動」

没頭して遊ぶ子どもたちの姿に接していると、気持よさが見ている方にも伝わってくる。

そのエネルギーは、子どもだけの特権に思われてならない。遊びながら発見し、驚き、喜び、困り、工夫し、新たな遊びを生み出す……という行為の繰り返しを、子どもの生活の中で、多く出会うことができる。その子どもたちの遊びの中で描いた「イメージや思い」に、子どもたちは全身の感覚と力とで、実現させようと懸命になる。その姿の中にも「結び行動」が観察できた。

<2—事例① タイヤを引ばりたくて……>

子どもたちは同じ場所で遊んでいても、それぞれが別々のイメージで遊んでいる（並行遊び）。その状況の中でお互いに刺激を受け、遊びの内容が変わることも多い。

A（5歳）が園庭に置いてある古タイヤに座り込んで遊んでいた。B（5歳）は縄とびロープを引きづりながら走りまわっていた。Bの持っていたロープが、Aの座っている前まで来た時、Aはそのロープの先端を握った。Aは座っているタイヤごと、少し動いた。その動きに興味をもったBは、タイヤごとひきづり始めた。AもそのBに呼応して、タイヤに乗ったまま、ロープの一端を握っていた。やがて、BはAの持っているロープを取り返し、タイヤにからめ始めた。Aもタイヤを立てておさえる……など、AとBは打合せなどをしないが、一緒に一つのこと熱中し始めた。

懸命に幾重にもタイヤにロープをからめ、ロープ同志もからめているうちに、結べた。

タイヤに交代で乗りながら、ロープを引っぱって遊んでいた。

<2—事例② ①の遊びが広がって……>

2人がタイヤにロープを結んで遊んでいる様子は、他児の興味を強くひいた。何人もがロープを引き、交代でタイヤに乗った。やがて、すべり台の傾斜面を登り始めた。ところがタイヤはなかなか上がっていかない。何度

も10人近い子どもたちは工夫して、上げることに熱中する。そのうち、ロープをすべり台の手すりに掛け、ひっぱってみた。すると、以外にもスルスルとタイヤが動く。何度かタイヤを傾斜面を往復させて満足していた。

子どもの発想の展開は大人には予測できないもので、手すりにかけたロープはそのままだし、タイヤを手すりのすぐ下に移動した。そしてロープを下方に引っばった。タイヤはエレヴェーターのように少し動いた。一人では大変なので、数人がかりでこのタイヤのエレヴェーターを動かして遊び始めた。

以上のような遊びをきっかけにして、部屋にもどってから、空箱にひもを結びつけ、壁の上にあるクギにひもをかけ、「ほら、本当のエレヴェーターだよ」と上下させて喜んでた。その後、そのエレヴェーターの左右に別の大きめの空箱を並べ、ビルにしていた。その箱のビルに、サインペンでビルの内部も描かれていた。

<2-事例③ 長いロープないの?>

運動会(10月)をきっかけにして、なわとびが流行した時のこと。保育者が遊具の鉄柱にロープの片方を結び子どもたちと、そのロープをゆらしたり、張ってくぐったりして遊んでいた。5歳~6歳になると、ひとりではなわとびができる子どもも多く見られる。が、保育者の刺激した、長縄とびは、子どもたちの興味を高めたようで、長いロープを持ち出し、友達同志で長縄とびを楽しむようになった。ところが子どものつくったグループ数分のロープはなかった。「長いロープないの?」とよく聞きにやってくる。その都度「あれしか、ないんだ、困ったな」と言い続けながら、短いロープをつないで欲しいと願っていた。短いロープをつなぐ姿が見られたのは、それ程時間を必要にしなかった。むしろ、5~6m程の長いロープより、短いロープをつないだ方がより長くなり、おもしろさが高まったようだ。

<2-事例④ ペンダントにしたいの>

3~4cmの丸い紙片にサインペンで模様を描いて、「きれいでしょ!」と見せに来た女兒(5歳)がいる。「ほんとにきれいだね、何に使うの?」という声に「いいの、ないしょ!」ともどっていった。

その後、いろいろな素材が入っている箱をあさりながら「こんなのないかな」と、片手には幅1cm程、長さが20cm位のリボンを2本持っていた。やっと4~5本見つけたが、思い通りの長さのリボンがない。その女兒は、見つけた短いリボンをつなぎ合わせ、先程見せてくれた紙片をセロハンテープで留め、首にかけた。ペンダントだったのである。そのペンダントはやがて、担任の保育者にプレゼントされた。

<2-事例⑤ ダンボールをつなげたい>

空いたダンボール箱は、子どもにとって重要な素材のようである。子どもたちにとって扱いやすい紙材でありしかも、大型の素材なので、敷いても立体にして組み合わせても、さまざまなイメージがわいたりし、没頭できる素材といえる。

そのダンボールに入って遊んでいるうちに、もうひとつダンボールをつなげたくなくなった。空いたダンボール箱をやっと見つけてきた子どもは、また困った。どうやってつなげるか、箱同志を組み合わせていた。フタ状の部分を別の箱にさし込んでみたり、手でおさえてみたりと懸命に考えて行動していた。やがてガムテープをさがしに行くが、他の子は貸してくれない。戻ってきて、手でダンボールをおさえてみたりしていたが、素材コーナーへ行き、ロープを持って戻ってきた。

ダンボール箱の横にあいていた小穴を見つけ、その小穴にロープを通し、箱同志をつなぎあわせた。

その行動で自信を持ったようで、箱に穴をあけ、ロープなどを通し、からげ、結び、つなげたり飾りにしたりして満足そうであった。

<2-事例⑥ 七夕飾り>

七夕の行事は、日本の伝統的な行事のひとつといえよう。その行事をどのように子どもたちの生活に融合させるかは、保育指導の上で重要な問題点のひとつである。

ここでは、そのような行事と保育とのあり方を論じない。その七夕の行事に子どもたちが関わりながら、結ぶこと、からげることなどの行為があった事例を掲げる。

昔はこよりを使って短冊を笹につるした。今でも昔ながらに行なう園もかなりある。調査した園は、こよりの代わりに木綿糸やたこ糸を使って、短冊やつくったものを笹に結んでいた。

その園では、3歳児にも参加させており、結ぶことができない3歳児(4歳児の一部の子ども含む)にも「つけた(飾れた)」という充実感を体験させるために、荷づくりなどに使用する荷札(2cm×3cm程の)を準備しあった。

子どもたちは、その荷札に自分のつくったものをのりづけし、その荷札の細い針金を笹の小枝に巻きつけていた。その真剣なまなざしは「落ちるなよ」と願っているようにも見えた。

<事例2-まとめ>

以上の事例から、子どもたちの行為は大人達から見れば、単なる遊びや模倣としか思えないことだが、子どもは、どの事例であっても、また、これ以外のどのような

状況の中でも、真剣に、体ごとで挑んでいることがわかる。

2一事例①のタイヤに結びつける行動や、2一事例③の短いロープを長くしようとする努力など、それぞれの子どもの行為には、それぞれの思いや考えが存在していることが明白である。

それらの思いは、遊びながらひらめいたことであっても、脳裏にしっかりとイメージされているからこそ、途中であきらめることなく、工夫し失敗し、また挑んでいく。

ほどけそうになると「どうすれば、ほどけなくなるのか」と、頭で考えるのではなく、体で考えているかのようになり、試行錯誤を繰り返す。

遊びのイメージ（こうしたい……という欲求）が、強ければ強いほど、懸命になり工夫する。そして完成の喜びでも倍加する。その時、一緒に行動していた友達と見合わせる表情が実にうれしそうであり、共感し合っている喜びなのだろう。また、一人でやっても完成した時の喜びは、すなおに態度で表わす。その時、タイミング良く保育者や身近にいる友達に、自分が考えた通りの完成を伝えることができ、そして理解される（共感を得る）ことができることで、一層充実感を感じていける。

からげる（絡げる）こと

2一事例①～⑥は、子どもの思いが強いだけに、何とかしようとする行為（試行錯誤）が、共通してみられた。

それは“結ぶ”という技術を獲得できたから、つなげよう、くっつけたい、などとイメージするのではない。

2一事例⑥の三歳児のように、つけられるか否かを考えてから、行動するのではなく、～したい……という願望が行動を支えている。

子どもたちの多くは、主体的に意欲的に生きようとしている。（そうあってほしいと願っている。）

そうした子どもたちであるからこそ、技術より以前にイメージ（思い）が先行しているのであり、その姿は、懸命に“からげる”という行為で、理解できよう。

結ぶ為には、他のものにロープやひもを“からげ”なければならぬ。一重であっても他のものに巻きつけることが、結び行動の始まりと言える。

1986年と1990年の「子どもの結び行動の実態調査」（1991年・日本保育学会で発表、十文字学園女子短期大学研究紀要第22集に集計結果掲載）は、3歳から6歳までの幼児234名を対象に「結び」行動について状況分析を行なったものである。その中で、おおよその「結び」行動の技術的発達の順序が明らかになった。

さらに、今回「からげる」行動について、調査結果を

再度検討してみた。すると、3歳児では、60.8%の子が4歳児では、70.5%の子が「からげる」行動していることがわかり、今回の行動分析を裏づけている。

（5歳児のからげる割合は、15.1%、6歳児では、10.1%であった）

前出の実態調査では「3歳の時にからげた子と、からげなかった子とでは、発達や行動面で著しく異なる点があるか」といった、追跡調査は実施していないので、結び行動と、からげる行動との関係を数値に置き換え考察することはできない。しかし、おおよその技術発達の姿が明らかになったことから類推すると、結ぶ（結べる）以前に行なっていた「からげる」ことが重要になってくる。

先にも述べたように、子どもなりに意志をもち、イメージをもって、懸命に「からげる」行為を、親や保育者など、子どもの身近にいる大人が認め励ますことが、子どもの主体的意志や行動を育むことになり、さらに、生活に有用な技術的発達をも促すことになる……と考えることができよう。

子どもの行動から「主体的意志」を読みとる

大人と違って子どもは、自らの行動を説明したりはしない。ほとんど子どもの行動を見つめていた大人の汲みとり（読みとり）方で、その行動の意味が決められる。

大人が行動を読みとる時の大きなヒントは、子どもから聞くことができる「つぶやき」であったり、遊びの様子による。今まで掲げた事例も、その「子どものつぶやき」によって理解してきた。

そのように、子どものつぶやきによって意志やイメージが理解されるが、ものとの関わり、変形変容させていく行為としての造形活動（造形行動）は、厳然とものが存在している……ということが重要な意味をもつ。

それは、眼前にあるものが、変形変容させた主体の意志を表わしていることが多い。広義に考えると、造形芸術全てが、この論に該当する、と言える。

本稿で掲げた事例のほとんども、子どものその時の心情が、からげられたり結んだ形状から察することができる。

ダンボール箱を懸命につないでいた（2一事例⑥）様子を見ていなかった場合でも、そのひものからげ方や結び目の数や重なりによって、子どもの気持ちが伝わってくる。同じような活動例を逗子市、私立かぐのみ幼稚園でも観察できた。

<事例一かぐのみ幼稚園の場合>

①子どもの主体的な活動を重視した保育を日々展開している同園でも、ダンボール箱を素材とした活動が展開

されており、そのダンボール箱同志をロープで結んでいたり、木に箱を固定させようとしていたり、箱のフタが閉まらないように(?)するためののだろうか、穴を開けてロープを通し、固定しようとしている。

その結び目は幾重にもからげてから結ばれているものや、結び目を重ねてつくってある(懸命に結ぶうちに、結び目がいくつもできたのだろう)ものなどである。

- ②三つあみにしたロープも随所に見られた。
- ③ブリキ製の菓子箱(贈答用の箱類)に穴をあけ、細い針金を通して、からげてとめていた。(ロボットか?)
- ④木枝を20~25cmぐらいに切っており、それに布や毛糸を巻きつけたり、縛ったりして、人形らしきものをつくっていた。
- ⑤ダンボール箱と布とを組み合わせで作った恐竜。
布の部分に切り込みが入っていて、その切り込みに他の布きれやリボンを結んである(本結びの変形)。
かなり、装飾的な意図を強く感じた。
- ⑥タイヤとロープで遊ぶことや、木を使った活動など、日常的に「結び」行動が多く観察できた。

⑤の事例は、秋川溪谷へ子どもたちとキャンプに行った時、シートと枝で小屋づくりをした。木や枝を釘で打ちつけたり、ロープで結んでつくった。完成した後、女の子数人が、ひもを張ってあるロープやシートのはじに、本結びの変形の方法で、20cmほどのひもを飾りつけていた事を想い出させてくれた。

考察3 表現と結び

先にも述べたが、子どもの行動から「主体的意志」を読みとる……ということは、造形行動の観点から明らかに可能なことである。

その造形表現を、心象表現と適応表現とに分類した理論もある。

心象表現は文字通り、心象性(イメージや想像したことがらなどを中心にした)を表わす造形領域で、絵画・彫刻といった活動をさす。

一方、適応表現とは、生活の中での人間の営みに呼応させた、より快適に(便利に)生活するための造形行動の領域をいう。つまり、建築も服飾も適応表現といえる。

この説を幼児の造形行動に当てはめてみようとするといささか無理がある。

心象表現はともかく、適応表現は、生活を実感した上で、より豊かに快適に過ごそうという、客観的知的立場から造形行動が始められる。子どもの行動は、そうした立場ではなく、遊び(行動)を通して、さまざまなものに

を知る。そして驚き、心象的表現もここから生まれる。

さらに、さまざまなものに触れて遊ぶうちに、~ができた……という具合に、偶然性の高い行動である。

この「結び行動」に視点をあてて考察してみても、整理整頓のための結びではなく、力学的な結びを予定して結んではない。しかるに、適応を目的とした造形行動として「結び行動」を、子どもたちはとっていない。

むしろ、心象にひきつづられながらの行動ではないだろうか。つなげようと幾重にもからげたり、結び目を何回も重ねてつくった様子からは、子どもの心象性(思い)を強く感じとれる。

しかし、その心象性は、結べた時点で子どもは満足して完了している。決して他人へその思いを伝えようとしたのではない。

その視点から考察するには、造形表現の伝達性について考えなければならない。

この「伝達性」は、林健造の“造形表現の三系論”によるものであり、その一系である。(ひとつはイメージの系、もうひとつが技術の系である):参考文献「幼児造形教育論」、造形表現過程の三つの系より、林健造著。

まさに「結び行動」は、技術(の系)を通し、想像(の系)=イメージと関わりながら、自己または他へ、そのイメージを伝えようとする(伝達の系)行為にほかならない。

伝達性のもうひとつの視点は、伝達先である。前文の下線部で指摘したが、一般的には、自分以外の他への伝達である。が、自己が自己への伝達もある。(自己伝達と他伝達という説、林健造説)

いわゆる、他人にはわからないイメージでも、自分にはよくわかり、そのイメージ内で満足できる行為であり前出の事例の中にも多く見られる。

考察1の身につける「結び行動」での、布の体に巻きつける、風呂敷をかぶる、マントにする……などの行為は、明らかに子どもにはイメージがあるが、具体的に伝わってはこない。聞いてみると「アンパンマン」と理解できるわけで、聞く前は「何かになりきっている」と、漠然とした理解にとどまってしまう。これは、子ども自身が自分に対して自己伝達していることになる。

おおむね子どもの行動は、このような自己伝達の中にあるのかもしれない。そして、他と共感できることで、行動が大きく変容していくようだ。それは、2一事例①や②、タイヤでの遊びやエレヴェーターづくりに見られる。その共感の姿こそ、他伝達をお互にしあっている姿なのだろう。

また、結び目を見て「これほどまでに、結びたかったのだな」と、結んだ子どもの気持を理解していく行為も表現を読みとる行為にほかならない。

考察4 装飾性と結び

1—事例③で示した「ひも（リボン）での結び行動」は、髪飾りやプレスレットであり、装飾にほかならない。

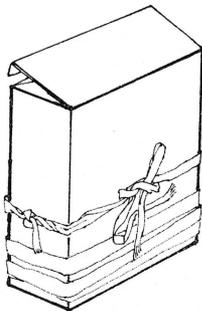
そして、結びながら子どもは自己伝達をしていたのだろう。

また「かぐのみ幼稚園の事例⑤」や、それに付随したキャンプでの小屋づくりの事例など、ひも類を本結びの変形で結び、ふさがたくさんついたようにしている行動は、どう考えても、機能性は乏しい。むしろ装飾的な行動のようである。

それは、女兒に多く見られる、髪飾りをつける行為に共通していよう。

<4—① プレゼント、あげる！>

図のようなプレゼントを6歳女兒から直接もらった。ボール紙製で16×13×6 (cm)の大ききの空箱、それにリボン（幅1 cm）が4重に巻きつけられている。サインペンで模様（？）も描かれている。



この箱を見て驚いた。

他人にプレゼントする時は、リボンをつける……と、子どもなりに大人の文化を吸収し、自分でできる限りの方法で、このプレゼントをつくり上げた……この事実を見せつけられた驚きである。（この箱をつくるのに懸命だったのか、箱そのものが目的だったのか不明だが、中味は入っていない）

結びきれない部分3ヶ所はセロハンテープで止められていたが、止め結びと蝶結び（少しくずれているが）が確認できた。

最近では、プレゼントが流行しているので、子どもたちにも、その影響なのだろう。しかし、日本文化の伝承として、贈答時の結びがある。いわゆる「水引」であり紙の文化を継承してきた日本独特のものである。

「水引をかけることは「自分を正しくして、先様を敬いこれに奉仕する」ことを意味しており、その心を「型」で表現しようとした”。色、配置、結び方などの約束が

あり、贈る目的の意義を表わしている。（引用文献：「結びの文化」額田巖著）

以上のような細部まで、子どもは知らないが「何かリボンをつけよう」と思った心は、日本文化の伝統を直感したのかもしれない。（前出のかぐのみ幼稚園の活動にも同様の行動があった。）

結

子どもの結び行動にも諸相があり、その行動の源のイメージを読みとる努力は、大人への課題であろう。

さらに、子どもの行動を観察し、子ども理解を深めなくてはならない。

また、体に布を巻きつける行動、結び以前のからげる行動、水引にも似たプレゼントづくり、などと接していると、まさに人類の源流を見せつけられた気がする。

縄文式土器の縄文文化は、文字通り縄の存在が原点であり、無土器文化の玉類や石斧など穴をあけるのも、縄を使っていたようであり、結びやからげる行為は、人類文化の源に思えてきた。さらに、考古学的な考察も加えながら、子どもの行動にひそむ、人間本来の造形的感性を探究していきたい。

Abstract

Some Phases of Children's "Knotting" Activities

Tomohisa Hirata

I have observed and analyzed children's activities of plastic arts in their daily life. Among them, "knotting"—tying strings, ropes, thread and such—has been understood as one of children's activities to interact with their surroundings.

Further into this study, I noticed the following: (1)the "knotting" activities change with the children's development, and they are also displayed in different ways by each child's own experiences; (2)children's thoughts and emotions could be grasped through those activities. Therefore they are a kind of expressive action.

In this paper these expressive elements involved in the children's "knotting" activities are discussed; for example, imagination, intention, communication and so forth. As a result, it might be said that they are closely connected with the "knotting" culture, for example, something like mizuhiki (Japanese paper strings tied in a ceremonial knot around the wrapper of a gift), and its historical aspects.